

## 与謝野晶子 寛文学碑

寛から晶子へ

かく師友の大恩に感謝を捧ぐると共に、寛はまた妻晶子に対しても深大の感謝を表せずして止む能はず。ああ晶子よ、君こそは現代の極東に於ける天成の叙情詩人なれ。(中略) 寛は君の歌に触れて開眼せられ、君の創作の神興に由つて激励せられしこと無量なり。

晶子から寛へ

良人の實力はその一部すらも世間に認められてゐない。その短歌の業績だけを云つても、明治以来は勿論、平安中期このかた、良人だけの豊富な独創を示した歌人は一人も無いと私は確信してゐる。日本の歌をほんとうに一新して、世界の詩の領域にまで引上げたのは此人である。

出典

「寛から晶子へ」は、『与謝野寛短歌全集』昭和8(1933)年2月の「自序」の一節

「晶子から寛へ」は、「横浜貿易新報」昭和8年3月26日の「鏡影録」より



- ・所在地 さかい利晶の杜内 与謝野晶子記念館  
(堺区宿院町西2丁1-1)
- ・建 立 平成27年3月15日 与謝野晶子倶楽部
- ・連絡先 堺市文化課 072-228-7143

文学碑の台座にある「副碑」の解説のとおり、この碑文はともに寛の誕生満六十歳にあたる昭和八年に書かれたものであり、寛の言葉には、詩人として今日あるのは、ひとえに晶子の詩歌によって開眼し、激励されたという深い感謝の思いが表明されている。また晶子の言葉には、三十有余年、常に書齋をともにし、夫寛の批評と助言なくしては自己の創作はありえず、誰よりも夫が詩人としての天分を持ち、すぐれた功績を築いたかを後世に伝えておきたいという信念が感じられる。

書見台に見立てられた文学碑は、晶子と寛のふたりが書齋をともにした文学的同志であることを象徴し、その書見台に置かれた書物の見開きに刻まれた言葉には、たがいにその詩人としての文学的資質を認め、全幅の信頼を寄せ合っていたことが明白である。

「さかい利晶の杜」に開設した「与謝野晶子記念館」の開館記念として、晶子顕彰に取り組んできた与謝野晶子倶楽部が、平成27(2015)年3月15日に建立し、堺市に寄贈した。